
現世の片隅で

超睡眠中

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現世の片隅で

【Nコード】

N0685Y

【作者名】

超睡眠中

【あらすじ】

この世には僅かな歪み、「イレギュラー」が存在する。そんな「イレギュラー」と「死神」の物語。

プロローグ（前書き）

初投稿です。駄文乱文で、誤字脱字が多々あるかもしれませんが。そのときや、「もっとこうしたほうがいい」などのアドバイスがございましたらコメントをくれるとありがたいです。

プロローグ

この世の中には、イレギュラーと呼ばれるものが少なからず存在する。歪な形を持って生きている人間のようで人間ではないもの。要するに、私みたいな奴のことだ。

私は不死である。

いや、完全なる不死とは違う。大昔の人間どもが血眼になって研究していた「不老不死」の薬の様なものではなく、ただ「死なない」と言うだけだ。食事もするし、当然排せつもする。毎年七月十六日には誕生日を迎え歳をとる。なの「死なない」のだ。「死ねない」と言っても過言ではない。そしてさらに奇妙なのが、本来アニメや小説の中にいる不死は傷すら瞬時に直してしまうが、私にそんな便利な能力は備わっていない。擦り傷切り傷はごく一般的だ。自分の命に危険がある傷だけ瞬時に直すという物で、おかげでこのイレギュラー要素を見つけるのにとっても時間がかかった。現在、私は十八歳だから……その能力を見つけたのは、この世に生を受けてから十一年、今から約七年前ということになる。

あれはまだ私が小学生だった頃だ。それなりにひろい私の住む町で、殺人事件が起こったのだ。どんな人間かその時点では分かっていたが、その狂人は被害者に相当の悪意をもつものだろうと、当時の私にも容易に想像できた。しかし、自分が考えているよりも狂人は身近に居て、更に自分の考えている通りの狂人ではなかったのだ。たちの悪い。

たまたま暗い路地裏に入っていたとき——何をしようとしていたかはよく覚えていないのだが。ずぶり、鋭利なものが肺、心臓もろとも貫いて、胸の位置から突起物が見えていた。赤く染まる服とこみあげてくる何か。そして身体が燃えるように熱い。不思議と「死」を連想することはなかった。そのままぐるりと後ろを振り向

くと、私が死んでないことに落胆するような眼をこちらに向ける覆面の男が新しい胸部に刺さっている者と同じものを構えると、もう一度私に向けて切っ先を向ける。

鮮血。

しかし、その赤い液体のおかげで体中の神経が同じ方向へ向いた。にやりというのが最も適切であろう顔、しかも己の返り血を浴びてところどころ赤く染まった顔を向けられて、若干、いや相当驚いたのか、その男はこちらに殴りかかってくる。一発目は腹部に直撃し小さかった私の体をはねとばす。既に私の体は痛みを感じていなかった。逆に体中に力がみなぎっているようだった。身体のポテンシャルがMAXを超えている気さえた。

——そのあと数分の記憶は曖昧で上手く言葉で表現することはできないのだが、記憶が鮮明になったのは病院のベッドの上だった。白い病院用のパジャマの下には左胸の部分に包帯がぐるぐると幾重にも巻かれていた。

ほんの二日ほどで退院できたのだが、親からも、医師からも「信じられない」と言われた。親はきつと神様が奇跡を起こしてくれたのだと涙していた。その理由が、狂人に貫かれた肺、心臓などの損傷が消失していたからだ。その頃の私は奇跡というものを信じていたのだが、よくよく考えてみるとイレギュラーとしての自分に薄々気が付いていたのだろう。それを認めたくなかったただけなのかもしれない。

ちなみに、その狂人は捕まったそうだ。自首したそうだ。あとは法の裁きを待つだけなのだ。

そんな死を超越してしまう出来事があったせいで、人間が一番恐れているもの「死」というものが怖くなくなってしまった。

「死」というものから解放されたと同時に私は「生」というものを失った気がした。

「終わりのない生は死と同義である」

と、誰かが言っていた気がする。まさにその通りだ。あまり何にも執着することもなくふらふらと生きてきた。

———今。私は約十年ぶりに「生」というものを実感した。

この世の中で最も「死」や「生」に近いイレギュラー、「死神」に出会ったのだ。

死神

なぜこんなことになっているのだろう。その質問に答えてくれるものは誰もいない。心の中でそう思っているだけなのだから当たり前か。

ともかく———目の前に死神がいるのだ。しかもうちの飯を食らっている。

毎日同じような時間を過ごし、帰路についたところだ。現在一人暮らしなため家の明かりはついていない。普段ならば。……普段ならば。点いているのだ。コソ泥でも明かりをつけるような馬鹿な真似をしないだろう。何事だというのだ。

泥棒や、狂人だろうと関係ない。死ぬことは決けてない。腕や脚の一本や二本持っていかれても時間はかかるが一晩で生えてくるだろう。

がちや。ばたん。

鍵を開けて自分の家に入る。入った瞬間に手厚い歓迎を受けた。

ひゅんと風を切る音が耳の数ミリ横を通り過ぎ木製のドアに半分ほどささった。そんな歓迎をしてくれたのは目の前に立っている自分より一回り以上小さい黒髪紅眼の少女だった。そして彼女は悪びれた様子もなく、背格好に似合うかわいらしい声でこう自己紹介した。「どーも。私、死神です……本物のね」

不死というイレギュラー要素がこの世に存在しているので別に得体のしれないモンスターや、神々がいてもおかしくはない。しかし、それが私を攻撃するという行為の答えにはならない。当たっても死にはしないが、当然痛覚は存在するのだ。痛い。

「さっそく何だけでも、貴方には死神になってもらいたいのに」
いまいち理解できない。イレギュラーではあるが、それを誰にも

知られずにひっそりと生きれるところまで生きていたいというのが私の願望だ。何故不特定多数の人間の魂を奪い恨まれる行為をしなければならぬのか。無理だ。

そんな顔をしていたらしく死神は一つ息をもらす。

「……理由は三つあるの。一つ目、貴方がこの世のイレギュラーであること。こんな仕事普通の人間ができるわけないじゃないっていうこと。二つ目、貴方に私の姿が見えていること。死神の中の規律で『己の姿は何らかの理由で人間から魂を切り離さなくてはならない時のみ現世に映すこととする』っていうものがあるの。それは今でも発動している。なのに貴方には見えているの。それは一つ目の理由とつながっているわ。三つめ、貴方は長に選ばれた。長の言うことは絶対。だから、貴方には死神になってもらう。わかった？」

わからない。わかりたくもない。話が見えなさすぎる。私以外にもどこかにイレギュラーは存在するだろう。他を当たって欲しい。

……ん？ まてよ。実体化できないのなら、何故この家の明かりは付いているのだ。

一旦、玄関で靴を脱ぎ捨てリビングにはいる。リビングからはなにも減っていないが、オブジェクトが一つだけ増えていた。ニンゲンという名のオブジェクトが倒れていた。

「それね、この家に入った空き巣なんだって。でも、以前にした悪行＋イレギュラーであるあなたの家に忍び込んだっていうことで魂を狩っていいって長から許可が出たからさっきの例外を適用して魂捕っちゃった」

何でもないというように、彼女は私にオブジェクトが増えた経緯を説明してくれた。とても知らなくていいかなと思った。平たく言えば殺したのだ。この世の中では魂がなければ肉体は生きることができない。逆はそうでもないらしいのだが。

「罪人の魂は私が地獄に落とす。それが死神の主な仕事。ちょっと荒っぽかったりするけれど」

問題はそこではない。このオブジェクトをどう処分したらいいの

か、だ。普通の生ごみのように捨てれるわけがない。しかし、ここにずっと置いておくわけにもいかない。とても面倒なことになった。葬儀なんて自分の家に入ったコソ泥のためにできるわけもないし、第一に金がない。

「大丈夫よ。すぐに食べてくれるから」

私の心の中を読んだかのようにそう告げるが、何がこれを食べるというのだ。彼女にいたっては至極当然のようにその場で口元に笑みを浮かべている。

「……………ほら来た」

その声とともにずっと重い空気のようなものが廊下から流れ込んできた。ライトに照らされているオブジェクトの影がだんだんと黒さを増し、大きくなっていく。影だったそれは質量を持ち始め大きくなっていく。そして私の腰辺りまで肥大したかと思うと先端が別れて、一本一本が独立し始めた。まるで真っ黒な手袋をはめた人間の手のようだった。それがオブジェクトの胴体を掴む――死神の言葉で食べると、見る見るうちにそのオブジェクトは黒いそれに吸い込まれていき、やがて、消えた。

跡形もない。存在が現世から失われた瞬間を目の当たりにした。

「これで一件落着でしょ。……私もお腹がすいたなー」
実体化はできないのではないか。

「どうせ貴方には見えてるし、いいかなと。ね、長様」

そういうと彼女の露出している左肩にある丸い青い紋章が赤く点滅した。

「ほら、問題ないっていつてる。貴方にはたくさん説明しなければならぬことがあるし」

そして、彼女は一呼吸置いていこう言った。

「腹が減っては戦はできぬって言うじゃない」

使い方が間違っている気がしたが深く追求しなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0685y/>

現世の片隅で

2011年11月7日03時24分発行